12回連載　エッセイ　第11話　「先制医療」に倣おう

徒然なるまま

安永暢男（元東海大学教授）

「日本傷痍軍人会」が解散した、というニュースを目にした。かつて 35 万人もいた会員が今年は 5 千人にまで減り、平均年齢も 92 歳と高齢化して会の維持が困難になったためという。「傷痍軍人」と聞いて、戦場で手足を無くしたり失明して復員したものの、何の補償も受けられず生活に窮した彼らが、白装束に戦闘帽というお決まりの格好でアコーディオンを弾きながらお恵みを乞う姿を山手線の電車内や新宿の地下道で度々見た終戦後の記憶が蘇った。

戦後 69 回目の夏が巡って来た。戦争にまつわるイベントやマスコミ報道が増えて、嫌でもあの戦争のことを思い出させられる季節でもある。昭和 17 年 5 月生まれの筆者は終戦時 3 歳と 3 ヶ月。東京の新宿近くにある母の実家の庭先で遊んでいるとき、空襲警報でも鳴ったのだろう、誰か部屋の中をバタバタと走り出すのが廊下越しに見えた。何だろうと家の中を窺がっている内にいきなり抱き上げられて、気が付いたら防空壕へ担ぎ込まれていた、というのが筆者に残る最も古い記憶である。戦後は、疎開先の練馬から空襲の焼け跡へ戻り、バラック小屋で食うや食わずの耐乏生活を始めたが、表の甲州街道の空地に MP のジープが停まっていれば飛んで行ってチューインガムをねだったり、隣に越して来た進駐軍の将校一家の子供が筆者と同じ年頃で、言葉も通じないのに毎日のように一緒に遊んだことなど、戦後ならではの記憶も次第に増えていった。進駐軍のトラックに轢かれた女の人が道路の真ん中でのたうち回っているのに、轢いた兵隊はガムを噛みながら平然と運転席に座ったまま、という異様な光景を目撃して、子供心に敗戦国の現実も認識させられた…。このように辿ってみると、自分の全人生として記憶している 70 年近い時間が日本の戦後の歩みにソックリ重なっている、という偶然に少なからぬ感慨を覚えるのは歳を取った証拠だろうか。

70 年の自分の人生が何だったかと顧みれば、もっと出来ることが沢山あったのではないか、何であんなバカなマネをしたのか…、諸々後悔ばかりの募るアッという間の短い歳月だった、というのが偽らざる実感である。その同じ 70 年を、国家としての日本は新たな戦争を仕掛けることも戦争に巻き込まれることもない平和な時代として繋いで来た。70 年もの長期間戦争のない時代が続いたということは、遡って太平洋戦争が始まる昭和 16 年までの同じ 70 年間の歴史と比較してみれば、むしろ特筆されてしかるべき稀有なことと捉えたほうが良いようにも思える。

昭和 16 年（1941 年）の 70 年前といえば、維新後間もない明治 4 年で、廃藩置県が実施されたのもこの年である。戊辰戦争

など維新前後の内乱が明治 10 年の西南の役を最後に終息すると、その後は大日本帝国として国外への関与も強めて行き、日清戦争（明治 27 年、1894 年）、日露戦争（同 37 年、1904 年）、韓国併合（同 43 年、1910 年）、第 1 次世界大戦（大正 3 年、1914 年）、満州事変（昭和 6 年、1931 年）、支那事変（同 12 年、1937 年）と、次第に大陸への干渉をエスカレートさせた挙句に太平洋戦争へと突き進んでしまった。つまり明治以降は、20 年と間を置かずに戦争を繰り返し、昭和に入れば毎日が戦時と言っても差支えないような状況が続いていたのである。

戦後にも、昭和 25 年に朝鮮戦争、昭和 40 年前後にベトナム戦争、今世紀に入って湾岸戦争やイラク戦争など、一歩間違えば日本も巻き込まれかねない危険な状況が何度もあった。にも拘らず平和を維持し続けられたのは何故か？戦争放棄を謳った憲法 9 条があり、そこから逸脱しなかったから、というのが戦前の 70 年間との比較から導き出される「正解」ということになろう。

ところが最近、折角のこの憲法を変えて戦争のできる国にしよう、改憲が難しいなら解釈を変えるだけででも兎に角と、政府が動き出したことに強い危機感を抱くのは筆者だけではないようだ。起こり得ることはいつか起こる、どんな争いも初めは蟻の一穴から、侵略戦争も始めるときは「自衛」の名目で…、と不安は膨らむ一方である。

医療の世界で最近「先制医療」という概念が広がり始めていると聞く。従来の医療が、罹ったら治すという「治療」が主体で、出来るだけ罹らないように気を付けようという「予防医学」がせいぜいであったのに対して、「先制医療」というのは、遺伝子検査やバイオマーカーなどの先進技術を駆使して病気の本体をいち早く捉え、病気が表に出ないうちに抑え込んでしまおう、発症する前に病気の芽を摘み取ってしまおうという考え方だそうである。なるほど、確かに病気になる前にその原因菌を退治してしまえば発症することもない筈である。

これは、ヒョッとすると医療に限った話ではなく、国際政治にも当てはまる解決法かも知れない。例えば、中国や韓国との外交関係が現在冷え込んでいるが、その最大の原因は“過去の歴史病”に罹患しているからという捉え方もできるだろう。とすれば、靖国参拝、歴史認識、領土問題などに関して、相手の嫌がる謂わば「病気の芽」を抑え込んで（封印して）対応する「先制医療」ならぬ「先制外交」が望ましい、ということにはならないだろうか。そうすることで相互の信頼関係が再構築できれば、産業・経済・文化・観光などあらゆる分野に蔓延した「病変」も急速に回復するのではと期待される。この「先制外交」に徹すれば、中韓との関係にとどまらず、世界の多くの「難病（紛争）」の克服にも先導的な役割を果たせる筈、と考えるのは理想論過ぎるか。

冒頭に書いた傷痍軍人会の解散記事の中に、「戦争がなく平和が続いたから、その結果（としての解散）ですよ」という最後の会長を務めた方のコメントがあった。傷痍軍人会が再び活動を始めなければならないような時代に決して戻してはならない。このことを為政者には肝に銘じてほしいとの思いを殊のほか強くしたこの夏である。

本欄はどんな話題でも OK とのお許しは頂いているものの、学会誌である以上関係のない話を長々と書くのはどうか、という躊躇もないわけではないが、“お盆の季節”に免じてご容赦頂ければ幸いである。